

エッセイ

アラブ詩における非暴力主義の伝統—日本と中東の平和主義を考える（続き） （初出『詩人会議』2018年2月号）

長沢栄治（東京大学名誉教授）

本稿は、本誌昨年2017年の3月号に寄稿した「日本と中東の平和主義を考える」の続編である。前稿では現在、日本と中東で平和主義がそれぞれの形で危機に直面していること、しかも二つの危機は互いに結びついていることを指摘した。さらにそれぞれの平和主義にとって「文学の力、詩の力」が果たす役割は何か、若干の例を挙げて論じてみた。世界の誰にとっても大切な平和のために、私たち市民にできることは何かを考える材料として。

前稿でも紹介したが、「東京新聞」は戦後70年に当たる2015年に投稿コーナー「平和の俳句」を設けた。一年間の掲載予定であったが、読者・投稿者の期待に応え、昨年12月まで三年間延長された。それに感謝する読者からの投稿もあった（吉沢功さん「東京新聞」2017年11月20日）。他の各紙誌や、もちろん本誌を含め、毎日のように投稿される平和の俳句や詩歌は、どれほどの数になっただろうか。その中でたまたま筆者の目を引いたのが以下の句であった。

「空爆の次は花見のニュースかな」 杉江美枝さん（横浜市）
（朝日俳壇「朝日新聞」2017年5月7日：大串章選・金子兜太選）

テレビに映るそのどす黒い噴煙の下に、どれほどの人々の苦しみや悲しみが隠されているのか。そのような思いにふける間もなく、あるいはそれを忘れさせるかのように、テレビの画面はお花見の行楽情報にすぐに移っている。中東で起きている惨劇と日本のお茶の間が直接つながっている風景を、鮮やかに切り取った作品である。

さて、筆者に依頼された課題は、中東の詩や詩人の状況であるが、文学が専門ではないので正直言ってなかなか苦しい。それでも、中東の文学的伝統における平和主義というテーマで少し紹介をしてみたいと思う。

最近、中東の法律研究者のシブリー・マッラート氏が来日され、そのお話を聞く機会があった。マッラート氏は、レバノン人のキリスト教徒で、人権派弁護士として広く知られている。1982年9月17・18日の二日間、レバノンの首都ベイルート郊外にあるパレスチナ難民キャンプ、サブラとシャティーラで、正確な数は今でも不明だが、1000～2000名に及ぶ人々が惨殺されるという事件が起きた。数次にわたる中東戦争や湾岸戦争といった国家間の戦争、そしてISをはじめとする過激派勢力のテロ、欧米・ロシアの空爆、最近のサウジアラビアによるイエメン空爆などを含めて、わずか二日でこれだけの数の無辜の民の命

を奪うような戦争犯罪は、その後、中東では起きていない。

事件から 20 年以上経った 2003 年、ベルギーの最高裁で、この非道な虐殺の実行犯であるレバノン・キリスト教右派の民兵組織とそれを助けたイスラエル国防軍の責任者に対する裁判が開かれ、マッラート弁護士は、主要メンバーとして参加した。戦争犯罪として断罪されたのは、イスラエルの故アリエル・シャロン元首相（事件当時は国防相）等であった。ここで歴史的な記録として言及しておきたいのが、この虐殺事件を告発する「国際民衆法廷」が日本でも開かれたことである。事件の翌年、1983 年に開かれたこの法廷の報告書は、小田実・板垣雄三・芝生瑞和編『レバノン侵略とイスラエル—国際民衆法廷・東京 1983』(三友社 1985 年刊) としてまとめられている。前稿でも指摘していたように、中東で絶えまなく続く暴力、人々のやり切れぬ怒りや悲しみの根底には、パレスチナ問題がある。

マッラート氏はその後も、アラブ革命の一環としてバハレーンの「真珠広場」で起きた抗議活動と弾圧（2011 年 3 月）に関する調停など、精力的な活動を続けている。その一方で、法律や思想に関する著書も数多く、一昨年（2016 年）には『非暴力の哲学』（英語）という本を著している。同書は、非暴力運動として始まったアラブ革命が、シリアでの悲惨な事例が示すように、さまざまな反動勢力の介入によって、血みどろの内戦や混乱を招いたことに対する怒りと抗議から書かれている。とくにイスラームがテロリズムを生み出す危険な宗教だと悪意をもって宣伝する勢力に対して、彼はアラブ・イスラームの歴史の中に非暴力の思想潮流が確実に存在することを描きだそうとする。

マッラート氏がイスラームの知的伝統における非暴力主義の例として取りあげるのが、アラブの「詩人哲学者」たちである。彼はまず、10 世紀中葉、アッバース朝時代に活躍した宮廷詩人、ムタナッビー（965 年没）の名を挙げる。イラク南部の古都クーファに生れたこの大詩人は、異端の宗教運動に加わったり、沙漠で放浪生活を送ったりした後、アレップを拠点にシリア北部地域で覇を唱えたハムダーン朝の軍人君主サイフッダウラに仕えた。数多くの戦乱を眼の当たりにした詩人は、その空しさを痛感していたのだろう。彼の代表作『詩集』（ディーワーン）には次のような詩句がある。

「葦の芽が伸びるごと 人はその頭に死の鉄冠を被せる」

あるいは

「我執による欲望などは 互いを仇敵として とどめを刺すまで戦いあうには値しないもの」

ムタナッビーから一世紀後に活躍したのが、盲目の詩人哲学者、アブーアラー・マアッリー（1058 年没）であった。その名前は、出身のシリア北部の村、マアッラ・ナウマーンに由来する。よく知られたマアッリーの著作に『寛恕の書簡』（リサーラ・グフラーン）という作品がある。宗教熱心な同時代の詩人を皮肉ることを意図して書かれ、天国を訪ねた

彼が、イスラーム以前のジャーヒリーヤ（無知）時代の素晴らしい詩人たちと出会う話である。よく似たモチーフを持つダンテの『神曲』（1317年）に3世紀あまり先行した作品で、これに影響を与えたとも言われる。同書でマアッリーが主張した「寛恕（グフラーン）」の精神は、宗教的熱狂が荒れ狂い、差別や排外主義が横行する時代において大きな意味を持っている。

また『不必要な必要』（ルーズミヤート）という別の作品には、次のような詩句がある。

「汝等が自らの宗教に真実を認めたなら 恥かしむべき醜聞を認めるであろう
若し正しき道を歩まんとするなら 決してその剣を血で染めること勿れ
身が受けた傷を詳しく詮索することもまた無用なり」

マアッリーの非暴力主義は、時を経るにつれ徹底し、故郷の村に隠棲した晩年は、潔癖な菜食主義者として生きたと伝えられる。『不必要な必要』には以下の詩句もある。

「水面より跳ね上がるものを食すること勿れ それは痛ましきこと
また獣を屠ってその生鮮な肉を求めること勿れ
雌羊の欲する純白の乳を奪うこと勿れ
それは仔羊たちのもの ただ酔い浮かれるだけの輩にではなく
無心で空を飛ぶ鳥を煩わすこと勿れ
網をかけることにより 不正は最悪の醜さなり」

マッラート氏によると、マアッリーの非暴力主義の思想は、ユダヤ教徒の哲学者・法学者のマイモニデス（イブン・マイムーン、1204年没）にも受け継がれていったという。イスラエル建国後、アラブとユダヤを互いに異なる、相容れない民族と見るのが一般的になった。しかし、こうした現代世界の「固定観念」を頭から取り去って考えれば、マイモニデスは、アラブ・イスラーム文明を代表する紛れもない「アラブの哲学者」であった。アラビア語で書かれた哲学書『迷える人々のための導き』（ダラーラ・ハーイリー）は、最近の研究によれば、ユダヤ教思想における非暴力の伝統を示す作品と見なされているという。確かにユダヤの民こそは、かつて世の東西を問わず、非暴力主義の伝統を生きてきた人たちであった。

マッラート氏がイスラームの思想伝統における非暴力主義として最後に指摘するのが、イスラームの神秘主義、スーフィズムの潮流である。スーフィズムとは、神の啓示（クルアーン）の表面的な理解にこだわる律法主義を超えて、修行により神との精神的な合一を目指す哲学的態度である。この静逸なる求道の哲学は、スンナ派・シーア派という宗派の違いを超えて、正しいムスリムの生き方を希う庶民の信徒の多くを惹きつけてきた。非暴

力主義を導く信仰の在り方を示すスーフィズムは、南アジアや東南アジア、アフリカといった地域にイスラームを広める上で大きな力となった。

昨年、2017年11月にシナイ半島北部の村で起きた襲撃事件は、エジプト近代史上、最大の犠牲者を出すテロの惨劇となった。ISに忠誠を誓う武装集団が狙ったのは、スーフィズムに所縁のある村のモスクであった。先に述べたムタナッビーやマアッリーが詩人として活躍したシリア北部やイラクの一部地域は、ISが2014年以来、4年にも亘って蟠踞し、神をも懼れぬ非道な行為を繰り返す舞台となった。前述のマアッリーの故郷の村には、彼を偲んでその胸像が建てられていたが、2013年2月、その首が刎ねられるという事件が起きた。ただし、この蛮行は、ISによるものではない。反アサド武装勢力の一つで、ISとは袂を分かったアルカイダ系のヌスラ戦線の仕業であったという。

中東イスラームの知的伝統の中には、これまで見てきた寛恕を重んじる非暴力主義の流れとともに、狭隘で過激な思想の系譜があることも、また認めなければならない。ただしそれは、人類すべてが長い歴史を通じて、たえず封じ込めようと努めてきた暗い衝動に連なるものであり、世界の多くの文明の伝統に広く認められるのではないだろうか。この伝統の影の部分は「サムライ・ジャパン」に興奮する日本社会において色濃く受け継がれてきた尚武の文化にも関係している。ある社会が深い傷を負ったとき、人々の悲劇や怒りを糧として、深い歴史の淵から、この暗い衝動が過激主義の形をとって表に現れてくるのである。それこそが、私たちがお茶の間のテレビを通じて垣間見る中東の悲劇の背景をなすものである。

現代世界において、中東ほどこうした心の傷跡と、そこから生まれてくる過激主義に苦しんでいる社会はない。現代の中東社会に深い傷を負わせてきたものは何か、そこに思いを馳せなければ、その傷を本当の意味で癒すことはできない。人々の心に傷を与える世界の大きな不正を正すことは、政治家や外交の専門家にだけに任せられた責任ではない。傷を負った人々が発する心の底からの叫びに耳を傾け、確かな形で、声や行動で応えることは、世界の市民の義務である。

[追記]

紹介したマッラート氏の英文著書の書誌情報は、以下のとおりである。

Chibli Mallat. *Philosophy of Nonviolence: Revolution, Constitutionalism, and Justice beyond the Middle East*. Oxford & New York: Oxford University Press. 2015.

同書で紹介しているユダヤ教における平和と暴力の歴史に関する研究書として以下の文献がある。

Robert Eisen. *The Peace and Violence of Judaism: From the Bible to Modern Zionism*. Oxford & New York: Oxford University Press. 2011.

シブリー・マッラート氏（ユタ大学／レバノン・マッラート法律事務所）は、2017年11月3日に開催した国際ワークショップに参加され“Law and Equality in the Middle East from a

Gender Perspective: a Post-2011 view”というタイトルで講演をされた（コメンテータ：大野聖良氏（学振特別研究員 PD））

同ワークショップは、筆者が研究代表者を務める通称「イスラーム・ジェンダー学科研」（IG 科研）によって開催された（「IG 研第 1 期」日本学術振興会科研費基盤研究（A）「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」平成 28～31 年度：2016-19 年度。科研費ウェブサイト：<https://islam-gender.jp/index.html>）